

Docetaxel (DTX) 治療後および耐性の再発乳癌に対する2nd, 3rd line chemotherapy としての有用性が期待されている。我々は進行再発乳癌に対し PTX の weekly 投与を1999年4月より開始し、その治療成績を報告する。対象は進行再発乳癌患者36例で、年齢中央値53.1(29~74)歳、転移臓器は1~4臓器で、肺16、肝7、軟部7、骨14である。無再発期間は342~3135日(中央値1111.2日)であった。PTX 初回治療例2例、前治療としてADMのみ(A群)19例(PD15例)、ADM+TXT(B群)15例(PD8例)であった。方法はPTX80mg/m²/week を3週投与し1週休薬を繰り返した。平均投与回数12.8回(2~6Kur)、観察期間は72~440(中央値209日)である。治療効果はA, B群でそれぞれ奏効率26%, 27%であり、Clinical benefit を反映する long-NC を含めればそれぞれ53%, 40%であった。Time to progression の中央値はともに5ヶ月程度であった。有害事象の検討では約半数に grade 3以上の血液毒性を認め、脱毛、抹消神経障害などが高頻度に見られた。PTX の Weekly 投与方法の効果は必ずしも高くないが、2nd, 3rd line chemotherapy としては満足すべき結果であり、投与方法、併用療法などさらなる検討が必要と思われる。

7) 進行乳癌に対する造血幹細胞移植併用大量化学療法の現況

張 高明・廣瀬 貴之(新潟県立がんセン)
今井 洋介(ター新潟病院内科)
佐野 宗明(同 外科)

【はじめに】進行乳癌に対する造血幹細胞移植併用大量化学療法は1980年代から実施され、予後改善の有効な方法として期待されてきたが、近年の比較試験の結果、通常化学療法に比較して必ずしも勝っているとは証明されていない。当院での乳癌に対する自己造血幹細胞移植併用大量化学療法および同種造血幹細胞移植療法の現況について報告する。

1. 自己造血幹細胞移植併用大量化学療法

【目的】進行乳癌に対する術後補助化学療法としての幹細胞移植併用大量化学療法の安全性および CAF 療

法と自己造血幹細胞移植併用大量化学療法の比較検討。

【方法】15歳以上70歳未満の腋窩リンパ節転移10個以上の進行例で、主要臓器機能に異常が無く、INFORMED CONSENT が得られた症例。CAF 療法(CPM: 500mg/m², 5-FU: 500mg/m², ADM: 40mg/m²)を3週おきに合計6コース実施。大量療法は CPM: 6000mg/m², Thio-TEPA: 600mg/m² を3日間で施行後自己末梢血幹細胞(あるいは自家骨髄併用)移植を実施。

【結果と考察】33例(35~68歳)が登録され、6コースのCAF 療法終了後23例で大量療法が実施された。現在までにCAF 療法単独群(A): 11例中6例、大量療法群(B): 21例中6例が再発している。平均観察期間24ヶ月の時点では、全生存率はA: 72.0%, B: 74.3%, 50%無病生存期間はA: 32ヶ月, B: 45ヶ月(p=0.025)である。進行乳癌における自己造血幹細胞移植併用大量化学療法の有用性の評価のためにはさらに長期の観察期間が必要と考えられる。

2. 同種造血幹細胞移植療法

【背景】同種造血幹細胞移植は移植後のドナーリンパ球による Graft versus tumor (GVT) 効果により自己移植では得られない高い抗腫瘍免疫効果が得られる。固形腫瘍においても GVT 効果を期待して同種造血幹細胞移植が積極的に実施されている。当院でも再発・難治性乳癌を対象として同種造血幹細胞移植の臨床第I/II相試験を実施中である。

【方法】移植前処置は有害事象の多発する従来の方法ではなく、近年開発された骨髄非破壊的的化学療法を実施し、造血細胞は同種末梢血幹細胞を使用する。

【結果】現在までに1例の移植を終了しており、安全に実施可能であった。本症例につき、詳細を報告する。

Ⅲ. 特別講演

「進行・再発乳癌に対する治療」

埼玉県立がんセンター内科第一部長

田部井 敏 夫 先生